第 8 章　都留の歴史 ――江戸期から都留市誕生まで

社会調査・地域調査 A　歴史班
メンバー：石川陽一　井口拓也　大柴有希　大橋美穂　河西麻利子　志村 渚

8.1　はじめに

問題関心

私たちが住んでいる都留という街は、富士急行線の新駅が開業し、その駅前地域の再開発が始まるなど、少しずつではあるが新たな発展を迎えようとしている。しかし、そのいっぽうで、城下町であった頃のかつての風情も街のそこかしこにとどめている。そこで私たちは、昔の都留はどのような街であったのか、今日の都留市はどのような経緯をたどって誕生したのかをめぐって、江戸時代から昭和期までの都留の歴史を追ってみることにする。そして、その作業から、現在の私たちに伝えられることはないかと探ってみたいと思う。

調査項目

都留の歴史的できごと、歴史的人物、建造物、お祭り、および、現在の都留市になるまでの過程について調べる。対象とする時代区分は、江戸時代から昭和時代（都留市誕生のころ）までとする。

活動記録

8 月 17～19 日	文献調査
8 月 31 日・9 月 1 日	八朔祭り取材、フィールド観察調査
9 月 14～16 日	文献調査
9 月 28 日	インタビュー調査

インタビュー調査の実施方法

対象者：	都留市郷土研究会　武井一郎さん、武井さん夫人
実施日時：	2004 年 9 月 28 日（火曜日）　15:00～16:30
場所：	「ミュージアム都留」資料室
質問者：	B 歴史班　6 名（石川・井口・大柴・大橋・河西・志村）
	A 歴史班　6 名（佐藤・北村・源田・小谷・小林・古宮・佐賀・眞田）計 12 名

8.2　江戸時代

秋元氏

秋元泰朝・富朝・喬知の 3 代は、1633 年（寛永 10 年）から 1704 年（宝永元年）までの 71 年間、谷村の地を統治した。秋元家は代々、土木建築に明るく、徳川幕府のブレーン的存在でもあった。谷村においては、農業用水や生活用水として利用された「谷村大堰」や「家中川」（かちゅうがわ）をつ

くり、城下町の整備を行ったほか、織物などの産業を発展させた。

秋元泰朝は、1634 年（寛永 11 年）の日光東照宮の大造営の際、造営奉行として諸社殿の造営を担当した。なぜそのような大役を任ぜられたのかについて、都留市郷土研究会の武井さんへのインタビューによって伺ったところ、「はっきりとした理由はわからない」とのことであった。しかし、秋元家が代々、土木建築に長けていたからではないかという説と、秋元家が譜代大名であったからという説があるという。秋元家は 1592 年（文禄元年）に徳川家康に仕えるようになり、その後、関が原の合戦や大坂冬の陣、大坂夏の陣などの功績により、譜代大名となったのであるが、譜代大名といっても新参者であり、徳川家のために懸命に奉公しなければならないということでやったという説もあるそうだ。

家康の死後、泰朝は 2 代将軍徳川秀忠、3 代将軍徳川家光の側近として仕え、1633（寛永 10 年）に 1 万 8 千石で甲斐国谷村に移封となった。泰朝は総社領内において、父親である秋元長朝の行っていた用水事業を受け継ぎ、用水開削や養蚕の奨励を行った。1636 年（寛永 13 年）からおよそ 3 年もの月日をかけて、田原の滝の上流から桂川の水を取り入れて「谷村大堰」（十日市場大堰）を開削した。

泰朝の孫に当たる喬知は、5 代将軍徳川綱吉のもとで 1681 年（天和元年）に寺社奉行となり、1699 年（元禄 12 年）には老中となって幕府を取り仕切った。綱吉に論語を講義するほどの側近であったうえ、江戸城三の丸造営や小石川御殿の普請、護国寺、東叡山中堂、綱吉の仏殿などを造営し、元禄大地震の復旧などの功績をあげている。また、老中の頃には忠臣蔵で有名な赤穂事件や絵島事件が起きており、それらの裁断に大きく関っていたという。

お茶壺道中

「お茶壺道中」とは、将軍家用に宇治の茶師に作らせたお茶を運ぶ「採茶使」の一行の行列のことである。1633 年（寛永 10 年）から制度化が計られ、1867 年（慶応 3 年）まで採茶が続けられた。この一行は、宇治にて茶詰をした後、江戸へ帰るのだが、その途中で茶壺の一部を谷村城に預けていた時期があった。この谷村城での保管は、夏期における茶の変質を避けるための保存であったとされる。お茶壺が谷村城で保管されていたことについては、当時領主であった秋元氏との関係がきわめて大きいと考えられる。（『都留市史 通史編』）

「お茶壺道中」関連年表

慶長 18 年（1613 年）	3 月 30 日	日下部五郎八宗好採茶の事奉り宇治に赴く。
寛永 10 年（1633 年）	2 月 19 日	歩行頭朽木与五郎友綱、神尾宮内少輔守勝、近藤五左衛門用行、安藤次右衛門正珍巡年に宇治茶詰の事奉はる。
	3 月 4 日	歩行頭朽木与五郎友綱宇治茶詰の事命ぜられいとたまふ。 この月（3 月）加藤肥後守忠広が伏見の邸宅府軍を引うつして、宇治の上林峯順勝盛が宅地に構造せられ、茶庫并番所とせらる。小堀遠江守政一、権左衛門政尹これを監せり。
寛永 18 年（1641 年）	3 月朔日	歩兵頭石野八兵衛氏照宇治採茶奉りて暇賜ふ。数奇屋のともがらも同じ。
	7 月 7 日	次に歩兵頭石野八兵衛氏照宇治より帰謁す。
	10 月 5 日	歩兵頭石野八兵衛氏照甲州へ茶壷とりにまいるとて暇給ふ。

	10 月 8 日	歩兵頭石野八兵衛氏照甲府よりかへり参る。
慶安 2 年（1649 年）	3 月朔日	歩行頭岡部小次郎忠次宇治採茶のいとま下さる。
	7 月 29 日	御茶壺を甲州郡内より持参するとて、歩行頭岡部小次郎吉次この事うけたまはる。
	8 月朔日	歩行頭岡部小次郎吉次甲州郡内より帰り参る。
慶安 3 年（1650 年）	3 月 22 日	松平伊豆守信綱は茶壺のことを掌り、阿部豊後守忠秋は刀剣のことを掌るべしと命ぜらる。
	3 月 26 日	歩行頭大久保荒之助忠辰宇治採茶の暇給ふ。茶道等もおなじ。
	4 月 27 日	この日諸老臣に宇治茶を試みしむ。
	6 月 25 日	歩行頭大久保荒之助忠辰宇治より帰参す。
承応 3 年（1654 年）	10 月 14 日	歩行頭小出越中守尹賀に茶壺のこと命ぜられ、甲州谷村につかはさる。（国初には宇治の茶をとる事、歩行頭京にまかり、その茶を壺に収め、愛宕の山頂に納め、一夏をすごして冬にいたり。江戸に持かへりしが、中頃より愛宕をとゞめられ、京より直に甲州谷村へつかはし、夏中をかれたりしとぞ。それも今はまた変じて、府城富士見櫓に置るゝことゝなりしといへり）
延宝 4 年（1676 年）	6 月 10 日	御側松平因幡守信興に茶寮の事つかさどらしめらる。
天和 3 年（1683 年）	4 月 26 日	従頭永見甲斐守重直宇治採茶の暇給ふ。
	8 月 26 日	従頭小出下野守守里、甲州谷村へ茶壺とりにつかはさる。
	9 月 7 日	従頭小出下野守守里甲州谷村より帰謁す。

（瀧本光清「『茶壺道中』と谷村」『郡内研究』第 10 号から作成。原典は『徳川実紀』）

織物（郡内平）

郡内地域は平坦地が少なく、気候や地質などの問題により、農業生産だけでは暮らしをたてることができなかった。そのため、農業を補完するものとして絹を織り出す、というかたちで郡内機業が始まったと考えられている。このような流れのなかで生まれたものの一つに、「郡内平」（ぐんないひら）がある。郡内平とは、夏用の袴地として用いられる薄手の織物である。1732 年（享保 17 年）に書かれた『萬金産業袋』による解説では、「これは袴地である。もよういろいろ、生糸にて地がうすくきれいに、しかもつやがよい。一定のもの５丈４尺に織り出す、袴地は３つ切にする」と書かれている。郡内平については、『都留市史』によると、

> 秋元家が谷村にいた時に、「家中の内職に夏袴を織りたるが郡内平」であるとしている。江戸時代の小大名や東北諸藩の大名の家臣は、家禄や俸禄だけでは生活が大変であったことから、内職や商売をしていた者がいたが、秋元家の家臣も、郡内に居城したときばかりでなく、川越や山形へ転封した時も、その地で夏袴地を内職として織っていたようである。こうしたことから、秋元家の家中への絹織奨励が、郡内平（夏袴地）の生産技術を郡内農村へ広めたことは十分に考えられる。（508 頁）

とされている。つまり、秋元氏によってもたらされたものと言えるだろう。秋元家が総社から郡内へ、そして川越、山形へと移っていった先で、家中織や袴地が生まれているという事実からみても、秋元家3代の影響力が強かったのは明らかである。

松尾芭蕉

「聖俳 松尾芭蕉・みちのくの足跡」によると、松尾芭蕉の郡内訪問は 2 度あったとされている。最初の訪問は1683年（天和3年）のことで、前年の江戸大火により焼け出された芭蕉は、秋元家の重臣で彼の弟子でもあった高山伝右衛門繁文（俳号は「糜塒（びじ）」）を頼り都留を訪れた。2 回目の訪問は1685年（貞享2年）で、『野ざらし紀行』の旅の途中で来訪した。滞在地については谷村説と初狩説とがあり、滞在期間にも3〜5ヶ月の長期「流寓」説と甲州国中地域や信州までの「甲州紀行」と諸説に分かれている。このうち、1683年（天和3年）の滞在は芭蕉の人生の中で一番長い逗留となり、この滞在期間中、逗留先である「桃林軒」において、芭蕉は高山伝右衛門や芳賀一晶らとともに俳句を練っている。

夏馬の遅行我を絵に見る心かな
散る蛍沓に桜を払ふらん　　（『一葉集』「へぼち草」の巻）

芭蕉は『野ざらし紀行』において蕉風俳諧を確立したと言われているが、郡内に滞在し都留の自然に触れ合うことによって、芭蕉は独自の侘びさびを見つけ出したという評価もなされている。

芭蕉の句に対する情熱は、現在の都留市民の間にも受け継がれており、句碑が建てられたり、俳句大会が催されたりするなど、熱心な俳句創作活動に取り組む街づくりが展開されている。

甲州騒動

1833年（天保4年）の「天保の大飢饉」においては、1836年（天保7年）までの3年間にわたって凶作が続き、飢饉の影響により、極困窮者は、店借層から家持・家主層、そして町役人層を含む上層家持・家主層の間にもおよび、社会的格差が広がった。また、米の価格変動も激しくなった。その変動に見舞われていた谷村では、1836年（天保7年）8月になると駒飼宿経由で入っていた甲州米が急騰し、入手困難な状態に陥った。そのため、甲州米の谷村への入荷は減少し、谷村の米商人は、8 月15日から売米の差し留めという事態を迎えることとなった。そのようななか、玉知屋友八が相州津久井郡日連村勝瀬の岡部政衛門に米 1,000 俵を差し送ったことが明るみになり、玉知屋友八をはじめ、但馬屋武助、現金屋弥助、永楽屋市右衛門、仲屋七郎右衛門、山岡屋源助の6軒の米屋が8月17日の夜、打ちこわしに合った。

これがきっかけとなったかは不明であるが、この事件に続き次々と郡内地方を中心に甲州に一揆・打ちこわしが広がった。同年8月20日、下和田村武七（次左衛門）、犬目村兵助を頭取とした一揆計画が進行し、甲州街道沿いの22ヶ村で「おとし文」がなされ、夜に入ってから大声で一揆への参加を呼びかけた結果、およそ2,000人の農民たちが集まった。彼らは15ヶ条の行動綱領を定め、統制行動をとることを誓約した。武七らの当初の計画によると、「身元相応」の者から分相応の金穀を貸しあげて村の困窮者に貸し付け、また、国中で甲府勤番支配らに願書を提出し、金穀の貸付を行って郡内への米穀の放出を促そうとするものだった。翌21日の朝、国中を目指して出発し、駒飼宿（大和村）をはじめとする本格的な打ちこわしを開始した。街道沿いの豪農や宮商を次々と打ちこわし、どんどん勢力を増してきた一揆は、さらに国中の貧農、小作、無宿の大量参加によって拡大し、激化していき、

22 日に、郡内農民が主目標と定めた山梨郡熊野堂村（春日居町）の豪商奥右衛門を襲撃した時には~~既~~すでに 1 万人以上になっていた。23 日には、甲府城下に迫り、甲府勤番は与力や同心を手配し、甲府代官所は手附、手代、足軽を出動させ、町方人足を大勢寄せ集めてこれを防ごうとしたが失敗に終わり、甲斐国内は無政府状態となってしまった。24 日、信州諏訪藩や駿州沼津藩などに出兵要請をし、26 日、ようやく鎮圧された。このおよそ 10 日間の騒動により、甲府町方のほか 106 ヶ村、305 件もの打ちこわしが行われた。首謀者らは 1838 年（天保 9 年）5 月に断罪となり、死罪 13 人（うち 12 人牢死）、追放 93 人をはじめ、受刑者総数は 562 人にもおよんだ。

この甲州騒動のさなかに谷村で起こった打ちこわしについて伝える史料はきわめて少なく、不明な部分が多い。数少ない残された史料である処罰者への裁許状によると、8 月 17 日に、彼らが、但馬屋武助らと思われる人物たちに「米価格を下げてほしい」と掛け合うため大人数で押しかけたところ、それを聞いた武助らが逃げ出してしまい、話し合いができなかったことを理由に騒動を起こしたという。おそらくこれが前述した打ちこわしに該当すると思われるが、この裁許状では「打ちこわし」という言葉は使われておらず、「居宅戸障子等為損」と、損なわせた程度と考えられるような表現がされており、打ちこわしとは少し異なるものであったようにも考えられる。（『都留市史 通史編』）

考察

秋元氏がつくった家中川は、400 年近く経った現在では、一部を水力発電として利用するなど、新たな技術も加えられ人びとの生活のなかに息づいている。このように現在まで残されているものがある一方、甲州騒動など谷村の人びとが発端となった事件や谷村を舞台とする歴史的なできごとについての集合的記憶と語り継ぎ、かつての産業など、すでに途絶えてしまったものや途絶えかけているものもある。自分たちの土地や先祖についての歴史的記憶が風化し失われるのは悲しいことである。「ミュージアム都留」のような歴史博物館を私たちはもっと利用し、この地の歴史的な奥深さを知り、親しみを深めながら生活していくことも大事だと思った。

8.3　明治・大正時代

都留市（当時の名称は「谷村町」）の明治・大正時代は、江戸時代に比べて娯楽施設がずいぶんと増えた時代である。都留は比較的東京に近いため文化が入りやすく、甲府に次ぐ文化都市であったという。また、1903 年（明治 36 年）に初めて鉄道がひかれ（大正 9 年に路線の電化）、1922 年（大正 11 年）には上水道が竣工し、1923 年（大正 12 年）から町営電気供給事業が開始されるなど、人びとの生活に大きな変化がみられた時代であった。行政・経済・産業などあらゆる面で変化のあった時代であるが、本節では、『郡内研究』創刊号・第 6 号、および『都留市史 資料編 近現代』の記述にもとづいて、当時の人びとの日常生活に関連したことがら、とくに人びとの娯楽を中心にまとめていきたい。当時の都留の人びとは何を楽しみにしていたのだろうか。結論を先に述べるならば、当時の谷村町はなかなかの賑わいをみせていたということがいえるだろう。

谷村座

娯楽の少なかった当時の時代に、「谷村座」という芝居小屋があったという。経営は数代続いたが、その初代は不明である。この谷村座で行われる芝居は、当時の谷村の人びとの楽しみであった。芝居

が行われるときは、近隣の村々からも人が集まったという。親子連れで見に来る人もいた。

谷村座は1877年（明治10年）に開業され、現在の「都留市中央2丁目4番地」に建てられた。その建物は東京の京橋、新富町にあった「新富座」を模して建てられたもので、当時にしてはこの建物自体が珍しく、評判になって、見物客で賑わった。開館披露は歌舞伎一座の河原崎権十郎一行を招いて盛大に行われた。谷村座は当初、「芝居小屋」と呼ばれ、各地から一座を呼んできては芝居を公演した。公演された芝居は評判が高く、石和で起こった強盗事件を扱った「針金強盗刑事誉」という際物（きわもの：一時的な流行を当てこんだ作品）は多くの観客を呼び寄せた。この他に、多くの観客を動員したものとして小金井秀男一座、子供歌舞伎大橋座、剣劇、道中物などがあった。大正時代に入ると、社会主義に関わる講演会がいくつか行われ、そのなかの思想問題講演会は県内で最も早く開催されたものであった。

旧谷村座（昭和24年5月13日の谷村大火で焼失）の建物は、先にも述べたように新富座を見本としていて、その構造は木造二階建てで、屋根の上には呼び込みができるスペースがあった。そして地下には、廻り舞台（舞台中央の床を回転するようにしたもの）、花道（観客席の中に設けた舞台との通路。役者が出入りする）のせり上がりも備え付けられていた。これらは現代のものと違って、手動式であった。舞台に向かって右側が太夫席といい、ここで義太夫が行われたり三味線を弾いたりし、左側は鳴り物やはやし（能楽や歌舞伎での伴奏の音楽）席とされていた。設備はほとんど手動式ではあったが、舞台としてはきちんと整っていたといえる。客席は一階と二階の両方にあった。また席は枡で仕切られていて、この枡に、注文に応じてお茶やお菓子などが運ばれていた。

若松館

「若松館」は、活動写真（映画）の常設館が県下で本格的に普及しだす1921年（大正10年）に、田辺博氏によって常設の活動写真館として開業された。若松館は、谷村座や他の映画館と激しい競争をしていた。その競争の様子が、当時の新聞に報じられている。1922年（大正11年）6月22日の「山梨日日新聞」には、若松館と吉田に新設された「寿館」の競争についての記事がある。その記事によると、「吉田に新設された寿館が、若松館の写真が替る毎に、二日間定期出張して谷村座で興行するので、激烈な競争が行はれている」と報じている。またその記事にはさらに、「若松館は写真を多く見せても、たったの10銭で、それに対抗した寿館は入場料が20銭と若松館より高いが、サイダーを一本サービスしてくれる」ということや、「寿館では松竹から、若松館では日活から甲府以上の大物を取り寄せてきた」ということも書かれている。この記事だけを読んでも、当時の盛況ぶりが手にとるようにわかりそうである。その後、若松館は1927年（昭和2年）に谷村座の内藤興業に買収され、「谷村映画劇場」と名を変えて経営が続けられた。しかし、1949年（昭和24年）には谷村大火によって焼失してしまった。この頃は、映画人口も増大したので仮設劇場（露天の青空劇場）で営業が続いた。仮設劇場でも、夏の夕涼みを兼ねての映画見物ということで好評を得ていたらしい。

谷村スキークラブ

日本には、明治時代にスキーが伝来したといわれているが、谷村でスキーが初めて行われたのは1914年（大正3年）のことで、奥源禄によって伝えられた。そもそも郡内にスキーが伝来したのは、1912年（大正元年）12月、高田連隊の鶴見宣信大尉一行がスキーによる冬山登山訓練を富士吉田で行ったことに始まる。このときの宿舎となった芙蓉閣大外河旅館の外河鯉太郎と谷村の奥源禄の2人によって伝えられた。しかし、翌年の高田連隊の登山訓練では、雪が少なかったためスキーをかついで

登山し、この時に墜落死亡事故が起こってしまったので、スキーは危険なものとして誤った認識が地元に広がってしまった。そのため、大外河旅館のスキーは片付けられてしまった。そこで、奥源禄がそれらをすべて譲り受け、仲間に貸与して白木山や競馬場で楽しんだ。その後、大江明正・西室貴義・宮井幾三らとともに、1918 年（大正 7 年）に「谷村スキークラブ」を結成した。しかし、当時の山梨県内では谷村以外にスキーをする人がいなかったので、「山梨山岳スキークラブ」と改名した。これが、都留スキークラブの前身にあたる。

谷村競馬場

谷村に競馬場があったと聞いて、われわれ調査班メンバーは驚いた。しかもそのあった場所が、現在、都留文科大学がある場所だと聞いてもっと驚いた。もう少し詳しく調べてみると、谷村競馬場は、1924 年（大正 13 年）に現在の都留文科大学の場所に建設された。毎年、春と秋の 2 回に数日間にわたってレースが開催された。当時から戦前にかけては、都留だけではなく山梨県内にたくさん競馬場が存在していた。なぜそれほどたくさんの競馬場があったのだろうか。それは、日本の馬は外国の馬に比べて貧弱なので、馬質を変える、つまり、馬を鍛えるためであった。その実用的な目的と娯楽の両方を兼ねていたのだ。

当時の競馬場の写真を見てみると、かなりたくさんの人びとが集まっている様子がうかがえる。盛況時には、楽山一帯に終日歓声がひびきわたった。ちなみに入場券は丸くて、紐が通してあった。そこには何と書かれてあるのか、写真で見たためよく見えなかったが、何やら注意書きが記されており、数字と漢数字が 1〜13（一〜十三）まで記されている。当時は、現代のように娯楽がさほど多くなかったので、人びとにとっては一大イベントであったに違いない。しかし、そんな谷村競馬場も 1933 年（昭和 8 年）頃に廃止されてしまった。

これらの娯楽のほかにも、1902 年（明治 35 年）にはテニスが盛んになったり、1915 年（大正 4 年）には野球チームの「桂クラブ」が誕生したりと、当時の谷村ではスポーツの娯楽もなかなか盛んであった。

8.4　昭和期

本節では、昭和元年から都留市誕生前後までの歴史についてみていく。わずか 29 年間だが、郡内地方の中心として栄えていた都留（谷村）の様子がうかがえる。文献調査とインタビュー調査を通じて知りえたことがらのなかから、重要と思われるできごとを追っていくことにする。

谷村町大火

1949 年（昭和 24 年）5 月 13 日午前 2 時 30 分、下谷下町の撚糸工場から出火し、火災は市街地の広範に及んだ。この火災は「谷村町大火」と呼ばれている。この谷村町大火について「都留歴史倶楽部」のホームページには以下のように記されている。

> …火事は、乾燥つづきの天候と折から 15 メートルの烈風にあおられ、焔はまたたくまに下町の一部、横町の全域、栄町、田町の一部を焼失する大火災となり、午前 6 時 50 分ごろようやく鎮火した。羅災地は谷

村町の繁華街の中心地であり旧家も多く、また東漸寺、専念寺、西涼寺の寺院や多くの文化財を焼失した。

谷村大火の被害状況

	戸数	世帯数	棟数	罹災人員
全焼	297 戸	315 世帯	391 棟	1,487 人
半焼	16 戸	24 世帯	6 棟	99 人
合計	313 戸	399 世帯	407 棟	1,544 人

（「都留市歴史倶楽部」ホームページより）

（「都留歴史倶楽部」ホームページより）

都留市誕生

前節までに取り上げたことは、いわば、都留市の歴史であって都留市の歴史ではないものである。より精確には、当時の名称に従えば「谷村町の歴史」といった方が正しいのである。それでは、いつからが「都留市」なのだろう。それは 1954 年（昭和 29 年）4 月 29 日である。谷村町、東桂村、宝村、禾生村、盛里村の 1 町 4 村が合併し、その新しい行政区域と自治体の名前が「都留市」と決まったときが、この「都留市の誕生」であろう。

都留市の市制施行の経緯に関して、「都留歴史倶楽部」のホームページには以下のように記されている。

昭和 28 年法律第 285 号をもって、町村合併促進法が制定された。都留市の発足も、この国の方針による合併計画に基いたもので、合併関係町村である谷村町、東桂、宝、禾生、盛里村の 1 町 4 ケ村合併の成果により、昭和 29 年 4 月 29 日に市制が施行された。

当時国に於ては、市の機構要件である人口 3 万は少なすぎるので、これを 5 万に引上げる法律を改正して、昭和 29 年 4 月 1 日から実施する方針であった。

谷村町が中心となって市制施行の動きが始まると同時に大月町も隣町村を合併して市制を施行する運動を始めたのが、都留市分市問題となった。

最終的には大月市も七保町、富浜村との協議が整い大月市制が施行されたが、都留市に合併反対の田野倉、小形山地区の問題は、県知事の「都留市と大月市の境界変更に関する勧告」を都留市が拒否したことから住民投票により決着をつけることになり、昭和 31 年 3 月 18 日に住民投票が行なわれた。結果は分市

賛成 465 票、反対 293 票で有効投票数の 3 分の 2 に及ばず分市問題は解決した。

市役所は、谷村町役場に置かれ、世帯数 5,761、人口 31,098、面積 161.68 平方キロ、塩山市に次いで山梨県下 4 番目の市として出発した。

新制中学校（都留第一中学校・第二中学校・東桂中学校）の発足

「都留市」というまちが形成されていくなか、市内はどのような様子であったのだろうか。教育という観点から考えてみると、新制中学の発足という動きがあった。それは、実際、どのような経緯をたどったのであろうか。市内の新制中学校発足の経過について、ホームページの「都留歴史倶楽部」のホームページには以下のように記されている。

昭和 21 年 4 月 7 日、米国教育使節団の報告により、小学校 6 年制と初等中学 3 年制が勧告され、文部省は昭和 22 年 4 月 1 日から 6・3 制の小・中学校教育制度を発足させた。

翌年 4 月 1 日からは、3 年制の高等学校が設置され、更にこの年から翌年にかけて 4 年制の新制大学も発足した。

谷村中学校の建築は、昭和 22 年度から着工し、同 26 年に現在の運動場敷地内に完成した。終戦直後の物資不足のため旧軍隊の兵舎を思わせる粗末な木造平家建ての建築であった。

昭和 40 年 4 月 1 日、市内の中学校 5 校を 3 校に統合整備され、東桂中学校のほか、谷村中学校が都留第 1 中学校となり、禾生中学校が都留第 2 中学校と改称し、宝・盛里中学校は第 2 中学校分校として発足した。校舎は四日市場の現在地に昭和 41 年度から着工し、43 年 12 月 25 日に完成した。（現在、宝・盛里分校は廃止）

第2中学校建築に伴ない谷村下谷地区の一部地域の要望により生徒は第2中学へ通学することになった。

昭和 26 年に新築された谷村中学校校舎（「都留歴史倶楽部」ホームページより）

都留文科大学

都留市と教育との関連を考えるうえで、新制中学の発足に続いて、市内に「都留文科大学」が設立されたことは重要な意味をもっている。都留文科大学の設立とその後の経過に関して、「都留歴史倶楽部」ホームページには以下のように記されている。

都留文科大学は、昭和 28 年 4 月 l 日旧谷村高等女学校校舎を仮用して、山梨県立臨時教員養成所として設立されたのが始まりで、2 年後の昭和 30 年 4 月に初等教育科と商経科の市立都留短期大学となった。

昭和 35 年 4 月、4 年制の市立都留文科大学が設立され、文学部初等教育学料定員 50 名、国文学科定員 30 名として発足した。

昭和 38 年 4 月、英文学科定員 50 名が増設され、初等教育学料定員を 110 名に変更し、昭和 41 年 4 月には初等教育学科定員 160 名、国文学科定員 60 名、英文学科定員 80 名に変更した。

昭和 41 年 8 月 31 日、上谷の現在地に新校舎が完成して移転し、昭和 46 年 4 月に初等教育学科定員 200 名、国文学科定員 100 名、英文学科定員 100 名に変更した。

その後、昭和 62 年に社会学科、平成 3 年に文学専攻課程、同 5 年に比較文化学科、同 7 年大学院文学研究課が開設されるなど、着実に発展している。

小都市の公立大学の経営にはこれまで幾多の困難に直面したが、市当局をはじめ歴代学長のもとに優れた教員、学生らの努力により、各施設の拡充につとめ、名実ともに飛躍的に発展をとげ、文教都市として全国から集う若者たちの活気が賑わっている。

歴史年表（昭和前期）

都留市の近代年表（昭和元年～昭和 29 年）

昭和元年（1926）富士山麓電気鉄道株式会社創立。郡役所の事務を県に移管。愛郷学堂落成式を挙行。谷村町消防組の副組長を 3 名制とし、9 部制に改組する。町長の兼務組頭制度を廃止する。12 月 25 日大正天皇崩御、昭和と改元。

2 年（1927） 警察署長官舎と演武場が落成。谷村商業銀行が第 10 銀行と合併し、商業銀行社屋を支舎とする。東桂村境出身の画家米山朴庵没。（64 歳）

3 年（1928） 谷村町役場庁舎が新築される。町立谷村高等女学校新校舎に移転。

4 年（1929） 谷村居住の画家五十嵐城南没。（62 歳）富士山麓電気鉄道大月～上吉田間開通。谷村町招魂殿落成式。

6 年（1931） 中央線甲府～新宿間の電化実現。谷村高等女学校が県立谷村高等女学校となる。県下中等学校野球大会に谷村工商学校初優勝。町別野球大会始まる。
柳条溝の満鉄線爆破事件を口実に関東軍が軍事行動をおこす（満州事変 9 月 18 日）。

7 年（1932） 1 月 18 目上海事変おこる。3 月 1 日満州国が樹立される。

8 年（1933） 禾生村上水道竣工。谷村町公益質屋が下谷 319 番地に開設される。

10 年（1935） 千段の滝の登山道が整備される。

12 年（1937） 禾生村新庁舎が建設される。国民精神総動員山梨県実行委員会が発足。7 月 7 日蘆溝橋で日中両軍が衝突し日中戦争はじまる。各地区に国防婦人会ができる。

13 年（1938） 開地村役場新築。井倉上水道竣工。

14 年（1939） 県下中学校野球大会に谷村工商学校優勝。地域、職場に勤労報告隊結成が促される。

15 年（1940） 県下で木炭、砂糖、マッチ切符制が実施される。紀元 2600 年記念祝典挙行。藤井霞郷 2600 年記念に尾県小学校へ「山径の秋」を寄贈。南北都留郡内のバス会社が合併して都留自動車が設立。日独伊三国同盟が締結される。大政翼賛会が発足。

16 年（1941） 大日本青少年団が結成される。第 10・有信銀行が合併して山梨中央銀行となり営業開始。ハワイ真珠湾を奇襲し第 2 次世界大戦始まる。

17 年（1942） 1 月 8 日、大詔奉載日と定められる。南都留地方事務所が谷村町役場内に設置。三吉・開地村が谷村町と合併。谷村町営ごみ処理場が建設される。町営電気部関東配電に統合される。中学校・高等学校の修業年限が中学校 4 年、高等女学校 2 年に短縮される。シンガポール陥落（2 月 15 日）

18 年（1943） 満蒙開拓南都留郷移民。山崎部隊長（禾生村出身）アッツ島に玉砕。谷村産報機山崎号飛来、小学生人文字にて歓迎する。未就職女子を調査して勤労挺身隊が編成される。金属回収で寺院のつり鐘、刀、織機などを供出。防空頭巾の携帯がはじまる。

19 年（1944） 8 月学童 237 名が谷村町、東桂村に疎開。谷村町号献納機命名式。県下全中学校生徒が援農に出動。7 月より神奈川、愛知県などに県下の男女学徒一斉出動。10 月 19 日神風特別攻撃隊が編成される（10 月 25 日初出陣）。11 月 24 日東京がB29 の初空襲をうける。学徒出陣。

20 年（1945） 甲府市大空襲、全市の 74%が焦土となる（7 月 6 日）。8 月 6 日米軍広島に原子爆弾を投下する（8 月 9 日長崎）。大月町空襲をうける（8 月 13 日）。天皇の終戦詔勅放送。第 2 次世界大戦終る。

昭和 20 年（1945）灯火管制解除される。（8 月 20 日）陸海軍兵士の復員がはじまる。
（8 月 23 日）天気予報復活する。国民学校を再開する。禾生小学校全焼。

22 年（1947）6・3 制の新制中学校設立。谷村工商学校野球部全国大会に出場。谷村労働基準監督署を谷村町役場内に設置。消防署を前島宅に置く。
昭和天皇行幸上谷の山梨染工（株）視察。

23 年（1948）谷村町に自治体警察を設け 5 ケ村を管理。消防署庁舎を谷一小前に新築し移転。宝村診療所を開所。谷村電報電話局開局。谷村土木出張所設置。

24 年（1949）谷村警察署（自治体警察）庁舎が新町に竣工。皇后山梨県行啓谷村織物工業組合、東桂村藤江喜四郎、関戸権一郎工場を視察。谷村～道志線バス運行。谷村町大火。

25 年（1950）南都留地方事務所早馬町に新築移転。禾生第 1 小学校校舎竣工式。第 1 回市町村対抗軟式野球大会に谷村町チーム優勝。

26 年（1951）谷村町警察署廃止となる。谷村職業指導所設置。

27 年（1952）谷村信用組合開設。都留信用組合桂支店開設。初の市町村教育委員選挙。

28 年（1953）県立臨時教員養成所を谷村町に設置。自動車教習所を大神宮境内に新設。

29 年（1954）都留市制施行。（谷村町、東桂、宝、禾生、盛里村が合併）分市問題おこる。禾生診療所開所。
第 1 回都留市芸術祭。第 1 回市民体育大会。都留市連合婦人会結成。

（「都留歴史倶楽部」ホームページから引用）

8.5　歴史的行事 ――八朔祭り

八朔祭り

「八朔祭」（はっさくまつり）は、9 月 1 日に毎年おこなわれる「生出（おいで）神社」の例祭である。「八朔」とは旧暦の八月一日のことをいい、地元では「おはっさく」と呼ばれ、神事例祭としてももちろんであるが、民間行事としても親しまれている。この祭りの歴史は古く、起源は江戸時代初期までさかのぼるといわれている。みどころは、総勢 130 名におよぶ大名行列と、各町自慢の豪華な飾幕をつけた屋台である。全国には、加賀の百万石祭、格式十五万石の箱根の大名行列、十万石の三条市大名行列などさまざまな大名行列があるが、これらのなかでも、歴史の古さと由緒は都留の八朔祭が最たるものだといわれている。秋元公が 1633 年にこの地に入封して以来､秋元泰朝・富朝・喬朝と 3 代続いた間に、政治経済・文化の発展をなし得た感謝の気持ちと、五穀豊穣を願って農民たちが十万石の格式に仕立てあげて表したのが由来とされている。(「都留市役所ホームページ」「都留歴史倶楽部ホームページ」)

八朔祭りと屋台

生出神社を氏神とする四日市場・下天神町・早馬町（はやんまち）・新町・仲町・下町・高尾町・姥沢の地域の人びとが参加し、大名行列や屋台の巡行をおこなう。かつては、各町の若者たちが競って豪華な飾り幕を飾った屋台を繰り出し、その舞台で芸者や若者たちが囃子に合わせてさまざまな出し物を演じ、豊年に対する感謝と喜びを捧げた。このような屋台の巡業も、交通事情などで一旦は姿を消したが、住民と行政が一体となり、近年再び、屋台（市指定文化財）の復元とともに復活した。八朔祭りの屋台は、江戸時代を代表する浮世絵師である葛飾北斎や藤原栄之、柳文朝など、当時最も有名な浮世絵師によって描かれている。(「都留市役所ホームページ」「都留歴史倶楽部ホームページ」)

八朔祭りのフィールド観察

筆者は、初めて都留にきて、八朔祭りを見る機会を得た。県外から来たので、伝統のある祭りと聞いても、いかなるものかと想像がつかない。調査活動の一環で前夜祭にでかけてみた。日も落ちたころ歩いて行ってみると、谷村駅の前にある倉庫から豪華な屋台が搬出されており、提灯の灯りが「早馬町」という文字を照らし出していた。歩道の上にはロウソクが灯されており「これはかなり本格的だ」と思った。しばらくすると小さな子供たちがお母さんといっしょにお囃子をしはじめた。練習を

重ねたと言っていたので、太鼓をたたく音にも一生懸命さが伝わってくるようだ。

そして、ほかの屋台も見るためにそこを後にした。ほかの屋台も負けず劣らず豪華で美しい。競い合って作っただけあって、まさに美の競演だ。「仲町」の屋台の上では、半被を着ている人たちを背後に、鮮やかな着物をまとった少女が、三味線の演奏にあわせて舞っていた。写真を撮ったのだが現像してみると、ほかの写真も写りが悪く美しい姿を拝めなかった、残念。どの屋台も創意工夫しながら祭りを盛り上げようとする気持ちが伝わってきた。

そして、ついに八朔祭当日がおとずれた。この日の大名行列に、他の調査メンバーが参加するというのでクラスの人たちと応援を兼ねて見学に行った。大名行列がはじまると、ここぞとばかりに観衆がカメラを片手に撮りまくる。たしかに間近で見るとおもしろい。獅子舞、殿様、紅一点のお姫様。本物の馬まででてくるとは…。行列が過ぎた後、各町の屋台を見るため、小学校の校庭に行った。整然と並べられた屋台はきらびやかに光り、そのなかに時代と伝統が感じられた。屋台といえば、食べ物を売っている屋台のことを忘れるわけにいかない。カキ氷やたこ焼きで舌鼓。意外にたくさんの屋台が軒をつらねており、人通りがはげしく（普段は少ないのに…）驚いた。校庭では地域の人たちの催し物も行われて、普通の祭りも兼ねているのだろうと思われた。祭りの最後には花火が打ちあがり、都留のまちを美しく染めた。八朔祭りはおもしろかったが、もっと文大生も積極的に参加すればいいのにと思った。連綿と続く歴史を後世に伝えるためにも。

参考文献・資料

都留市史編纂委員会編、1993、『都留市史 資料編 近現代』都留市役所

都留市史編纂委員会編、1996、『都留市史 通史編』都留市役所

都留市郷土研究会編、1987、『郡内研究』創刊号

都留市郷土研究会編、1996、『郡内研究』第 6 号

滝本光清、2000、「『茶壺道中』と谷村」『郡内研究』第 10 号、都留市郷土研究会

都留市教育委員会編、1986、『目で見る都留市の歴史』都留市教育委員会

林述斎・成島司直ほか、『徳川実紀』

三宅也来、1732、『萬金産業袋』

山梨県繊維工場試験場、1975、「創立 70 周年記念誌 ―郡内機業のあゆみ―」

「山梨日日新聞」1922 年 6 月 22 日

奈良泰史「都留歴史倶楽部」ホームページ

（ http://www.geocities.jp/yasushinara/index.htm, 2004 年 8 月 18 日）

「松尾芭蕉の総合年譜と遺書」ホームページ

（ http://www.bashouan.com/psBashou_nenpu.htm, 2004 年 9 月 15 日）

「都留市市役所ホームページ 観光総合情報」

（ http://www.city.tsuru.yamanashi.jp/ka_tantou/sangyou/kankou/page/kuhi.html, 2004 年 9 月 14 日）

「都留市市役所ホームページ 八朔祭り」

（ http://www.city.tsuru.yamanashi.jp/sight/hassaku/hassaku.htm, 2004 年 8 月 18 日）